

第5回理学部RCセミナー

産学連携の基礎知識

講演者：北陸先端科学技術大学院大学 教授
高木 昌宏



日時：2024/7/25 (木) 15:00-17:00
場所：理学部講義棟S31

日本中の大学で産学連携が号令のように叫ばれている。「そもそも大学は、純粋な探究心に基づいた研究が行われるべきである。」こんな反対意見も聞こえてくる。今回の講演では、産学連携が関係する4つの論点について、皆さんと一緒に考えたい。

【論点1】基礎と応用（末梢研究ではなく基礎研究）

「大学の研究がすべて基礎的ならその各々から大枝小枝が出て発展するはずだが、そうした例は極めて少ない。つまり大部分は基礎的ではなく末梢的なのである。そこで金儲けと縁のない研究を純正的と呼ぶことにしよう。私は、研究費を使うだけの研究を「純正研究」、使うだけでなく金儲けの魂胆があるものを「応用研究」と呼んでいる。」（上田良二：名古屋大学）基礎↔末梢、応用↔純正と考えるのである。純正基礎研究、応用基礎研究を進めるべきで、応用末梢研究や純正末梢研究には、あまり価値が無いと言える。しかし研究者なら誰しも自分の研究が末梢研究だとは思いたくない。

産学連携は、自らの研究が末梢研究で無いことを証明する一つの重要な手段である。

【論点2】プロジェクトとミッション（目標ではなくビジョン）

これまでは、「コストや利便性」といった具体的な目標を立て、メンバーが特定のタスクを遂行し、進捗状況を追跡して目標を達成してきた（プロジェクト型）。しかし今求められているのは、目標よりも抽象的なビジョンである。コストや利便性よりも、例えば社会や環境への貢献や、顧客満足度といった概念的な価値が重要視されている（ミッション型）。

産学連携もプロジェクトではなく、ミッションとして進めるべきである。

【論点3】クローズドイノベーションとオープンイノベーション（線形ではなく非線形）

過去、イノベーションを起こした基本的手法は、企業内のリソース（ノウハウ・人材等）のみを活用するイノベーションであった（クローズドイノベーション）。しかしこれからは、内部のリソースだけでなく、外部の知識・技術・アイデアを活用してビジネスモデルを開発する必要がある（オープンイノベーション）。見方を変えると、多様な価値観が存在する現代において、価値が一方向に流れる論理的なモデル（リニア（線形）モデル）は、すでに崩壊している。産学連携は、オープンイノベーションの手段なのであって、目的ではない。

【論点4】パートナーとコミュニティ（マッチングではなくビルディング）

産学連携は、「ニーズ・シーズ・マッチング・商品化」ととどまらない。事業化、スタートアップ、イノベーション、社会的課題解決、テクノロジーハブやエコシステムの形成をも視野に入れた、ビジョンに基づくべきである。シリコンバレーにおけるオープンイノベーションは、代表的成功例である。そこでの関係性は、表面的なマッチングでは無く、多様な価値観と信頼関係に基づいたビルディングである。パートナーを見つけるのではなく、コミュニティを形成するのである。私自身が経験した産学連携の成功例も、学会活動等から生まれた「利害を越えた人間関係のビルディング」から始まっている例が少なくない。

共催：先端ナノ・バイオ分析研究ユニット、プラズマ医療・農水産応用研究ユニット

（第14回先端ナノ・バイオ分析セミナー）

連絡先：座古保 (化学コース、ext 9609)